

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

An Inquiry on the Revivalism of "Si fo gok (Guangdong Music Groups)" in Guangzhou, China

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 洋尚 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5597

〔論文〕

中国広州市における「私伙局」ブームの一考察

—— 本地人と客家人によるサウンドスケープの再生 ——

河 合 洋 尚

1. はじめに

中国広東省では近年、地方の音楽および劇を復興させる動きが高まっている。とりわけ広東省の省都である広州市およびその近隣の諸都市においては、「私伙局かきょく」と呼ばれる民間の広東音楽団が次々と組織されはじめており、華人社会において注目を集めるようになってきている。筆者は、2005年4月から2007年7月にかけて、広州市にて歴史的景観の再生にまつわる調査をしたが、その再生の動きに関する重要な項目として、「私伙局」の興隆現象に着目した。というのも、「私伙局」は昔日の光景を想起させる音をつくりだす伝統的楽団として、社会的に注目されつつあるからである。そこで、本稿では、「サウンドスケープ」の概念を借用することで、広州市における「私伙局」ブームの一端を考察していくことにしたい。

サウンドスケープ (soundscape) は、音 (sound) と、「眺め」を意味する接尾語 (-scape) との複合語であり、「音の景観」を意味する。景観は、しばしば視覚による「眺め」として理解されるが、これまで音響学の諸研究が示してきたように、視覚と聴覚との間には互いに印象を強調しあう共鳴現象がある⁽¹⁾。たとえば、今まで眼にしてきた景観の記憶の違いから、音の感じ方が変わってくる。逆に、今まで耳にしてきた音の記憶に応じて、脳裏に浮かんでくる視覚的な光景が異なってくる。サウンドスケープとは、かような個々の音の記憶により想起される個々の景観にほかならない⁽²⁾。

さて、サウンドスケープの概念を初めて理論的に提示したのは、カナダの作曲家マリー・シェーファーであった⁽³⁾。彼は、近代化の波によって個々の場

所の記憶をともなった音、すなわち川のせせらぎ、鳥のさえずり、教会の鐘などの音が消失していくのを嘆き、それらを保護・再生させる重要性を唱えた。また、「サウンドスケープ・デザイン」と呼ばれるプロジェクトを実施することで、個々の場所における人々の音の記憶を調査し、ローカルの音景観を保護するデザイン活動に着手してきた。

サウンドスケープ・デザインは、虫の音や汽笛などを題材として日本の都市デザインにおいても採用されている。だが、筆者が専攻する社会—文化人類学においては、サウンドスケープの概念は一部で批判の対象となってきた。たとえば、著名な音楽人類学者であるスティーブン・フェルドは、「サウンドスケープは、ある高められ美化された距離から聞いた音環境にすぎない」⁽⁴⁾と指摘する。つまり、サウンドスケープは、所詮は外部者によってデザインされた代物であり、日常の生活実践と結びついた音ではないというのである。フェルドはむしろ、草木のざわめきだけで天気を知り、歌うことで地理感覚を把握するなどといった、身体化された (embodied) 音に着目している⁽⁵⁾。

こうした批判に反して、シェーファー自身も早くから「サウンドスケープ・デザインは、決して上からのデザインであってはならず、むしろ内からのデザインでなければならない」⁽⁶⁾と述べてきていた。しかしながら、サウンドスケープ・デザインが「デザイン」という性質を備えている以上、とりわけ世界各国の政策で実際に採用される場合には、政治経済的目的に利用される対象と容易になりうる。

経済地理学者であるデヴィッド・ハーヴェイは、後期資本主義の経済体制が、いかに各都市の「特色」をグローバルに醸成してきたかについて指摘している⁽⁷⁾。同様の状況は、市場経済化の道を1992年から歩み始めた広州市においても認められる。広州市では近年、歴史的景観の再生を図ることで、都市の「特色」を積極的に醸成しようとしている。すなわち、自然や建築といった物理的環境のみならず、広州市の「古き良き」生活様式、民俗活動および音環境を再生することで都市間の競争に打ち克つための「特色」を出そうとしてきた。

本稿では、もともと「内からの」デザインとして提起されたサウンドスケープが、いかに非西洋社会において都市の諸政策に逆利用されているかが示され

る。ただし、広州市は「私伙局」を都市建設や華僑政策のための「資本」として用いてこそきたが、その市民は、後に論じるように「私伙局」をポリティクスの道具としてのみ扱ってきたわけではない。本稿は、彼／彼女たちが自らの目的をもって主体的に「私伙局」の活動にとりくんできた側面にも着目して考察することにした。

2. 広州市における「私伙局」の興隆と政治経済的背景

(1) 珠江デルタにおける「私伙局」の興隆

本節では、広州市において「私伙局」が興隆してきたプロセスの社会的背景について言及するが、その前に「私伙局」とは何であるのかについて触れておきたい。

「私伙局」を広東語の語義通りに訳すならば、個人（私）で仲間（伙）をつくって広東音楽を演奏するグループ（局）のことになる。つまり「私伙局」とは、民間で自発的に組織される広東音楽の楽団を意味する。また、「私伙局」では、広東音楽の演奏の他に、広東音楽に合わせて踊る広東劇が催されることも少なくない。ただし、その本来の意味において、「私伙局」はあくまでも広東音楽の演奏や歌唱をベースとしている⁽⁸⁾。

メディア界および学術界における大方の認識によると、「私伙局」の源流は「灯籠局」にまで遡ることができる⁽⁹⁾。「灯籠曲」の呼称は、広州市とその近隣都市にて富裕層が広東音楽の芸人を雇って自宅で演奏させるため、門に灯籠を掲げて開局を知らせていたことに由来する。だが、「灯籠曲」はあくまで雇用のうえで組織された楽団であり、また対外的に開放されてはいなかった。それに対して「私伙局」は、第一に、仲間内で自発的に（つまり自分たちで金を出し合っ）て組織していること、第二に、対外的に開放されている（つまり誰でも参加できる）こと、の2点において「灯籠曲」とは異なるとされる。官方の見解によると、こうした「私伙局」は民国期に流行し、とりわけ富裕層の子弟の間で流行した。後に、1966年から始まった文化大革命により禁止されたが、1978年に改革・開放政策がはじまるとともに再興ははじめたという⁽¹⁰⁾。

さて、かような「私伙局」は改革・開放後、いかに広まっていったのである

か。先学の研究に基づくと、「私伙局」が興隆しはじめたのは1990年代であり、広州市とその近隣諸都市を中心に展開していった⁽¹¹⁾。広州市とその近隣諸都市の一带は、珠江と呼ばれる河川の三角洲地帯に位置するので、俗に「珠江デルタ」と呼ばれている。図1から一目瞭然であるように、珠江デルタには、広州市だけではなく、香港とマカオの両特別行政区および、深圳市、東莞市、佛山市など、中国でも有数の経済力を誇る諸都市がひしめいている。この地帯は、上海一帯の長江デルタと並んで中国でも有数の経済圏として知られており、1990年代には「世界の工場」として名を馳せてきた。それゆえ、珠江デルタにおける近年の「私伙局」の興隆は、そのような経済力の向上と結びつけて説明されることがしばしばあった。つまり、経済的な向上が「私伙局」という文化的豊かさをもたらしたという、唯物論的な論理が数名の中国人学者によって展開されてきたのである⁽¹²⁾。

こうした唯物論的な見解が果たしてどこまで有効であるかは後の考察に譲るとして、特に1990年以降の珠江デルタでは、「私伙局」の数が確かに飛躍的に

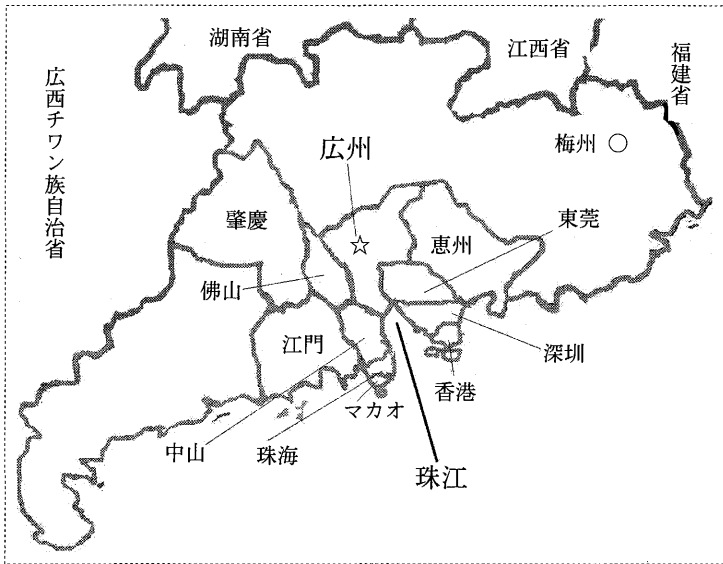


図1 広東省および珠江デルタの地図

伸びたようである。たとえば、統計データに基づくと、広州市番禺区では、1996年に「私伙局」は20楽団しか存在していなかった。だが、2000年になると3.5倍の70楽団に増えている。なかでも、番禺区の一画にある鐘村鎮においては、1990年代後半のごく短期間のうちに、1つしかなかった楽団が10以上にまで増大している⁽¹³⁾。

また、広東音楽の専門誌である『南国紅豆』誌（2005年）によれば、中国国内（香港、マカオ、台湾を除く）には1450から1600の楽団が存在するようになっているが、そのうち8割以上は珠江デルタにある9つの都市（すなわち、広州市、深圳市、珠海市、佛山市、中山市、東莞市、江門市、肇慶市、惠州市）によって占められている。さらに、同誌のおおまかな統計に基いて言えば、香港に150、マカオに90、台湾に15、アメリカに100以上、カナダに約100、シンガポールに100以上、インドネシアに30～40、マレーシアに70～80、ベトナムに100の「私伙局」が結成されている⁽¹⁴⁾。このようにして見ると、中国の「私伙局」は珠江デルタを中心とした比較的狭い範囲に集中してはいるが、同時に世界の華人社会において少なからず注目を浴びているものであることが分かる。

（2）広州市における「私伙局」の復興

では、本稿の調査対象である広州市における「私伙局」興隆の度合いとその政治経済的背景について見ていくとしよう。

すでに述べたように、広州市は中国広東省の省都であり、2006年末の統計に基づけば、戸籍人口は760.72万人である⁽¹⁵⁾。図2に示されているように、広州市は、市の中心である越秀区をはじめ、東山区、荔湾区、芳村区、海珠区、黄埔区、白雲区、天河区、花都区、そして番禺区の10区に分かれている⁽¹⁶⁾。そのなかで、2000年もの長期間にわたって城の所在地であり続けた越秀区、および東山区、荔湾区、海珠区は、歴史的に広州市の中心部として機能してきており、俗に「四老城区」と呼ばれている。

さて、先に取り上げた2005年の『南国紅豆』誌によると、広州市における「私伙局」の数は総計して280楽団であり、全中国のおよそ5分の1を占める。そのうち、広州市でも特に、広東音楽および「私伙局」が盛んであると公的に

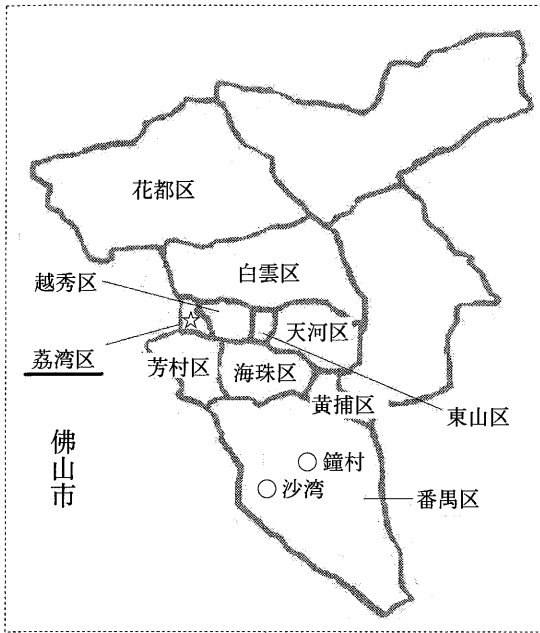


図2 広州市地図と荔湾区の位置

みなされているのは、番禺区と荔湾区である。前者は、統計に基づけば最多の80楽団が存在するとされ⁽¹⁷⁾、特に区内の鐘村鎮と沙湾鎮は「私伙局」の興隆地として名高い。鐘村鎮は先に見たように1990年代以降「私伙局」が飛躍的に増えたため、「鐘村現象」として脚光を浴びた町である⁽¹⁸⁾。また、沙湾鎮は、何家三兄弟をはじめとする数々の広東音楽の大師を生み出してきた町であり、1998年には広東省政府より

「広東音楽の故郷」なる称号を授かったことで知られる⁽¹⁹⁾。

他方で、後者は、荔湾区政府が公式に出している数値に基づけば32楽団である。『南国紅豆』誌の数値では、四老城区および芳村区、黄浦区、白雲区、天河区における「私伙局」の総数は160楽団であるというから、数としてはそれほど多くはない。しかしながら、荔湾区は「中国曲芸の故郷」なる称号を国家より与えられていることから分かるように、広東音楽の中心地としての権威をもっている。また、いくつかの面で荔湾区は、広州市ひいては珠江デルタにおける「私伙局」ブームの先導役となってきた。

第一に、荔湾区では、区政府が早い段階から「私伙局」の価値に目をつけ、政府レベルでこれを促進してきた。1986年より区政府の主導で「私伙局」の交流試合を毎年主催してきただけでなく、その後、区内に広東音楽の学校をいくつも建設してきた。そこでは、高齢者・退職者向けの娯楽班から、子供向けの

トレーニング班まで幅広く広東音楽が学べるようになっていた⁽²⁰⁾。同種の交流試合は1989年より広州市レベルで開催されるようになった。

第二に、「私伙局」の名称そのものが荔湾区にて誕生したという。すでに述べた通り、公的な見解では、「私伙局」は少なくとも民国期にはすでに存在していた。しかし、ある学者が主張するに、「私伙局」という語は、荔湾区政府が1985年に広東音楽のコンサートをおこなったとき、記者たちがはじめて名づけたことに始まるという⁽²¹⁾。確かに筆者もまた、調査の過程で「私伙局」という言葉があまりにも現地のお年寄りに通じないので、「民間の楽団」など別の表現に置き換えて聞きとりをおこなっていた。言葉のうえで「私伙局」という語が普及し始めたのは、このようにごく最近のことであると考えられる。換言すれば、「私伙局」という名称ではじまった広東音楽復興のブームは、荔湾区を先導役としてきたと想定できる。

では、そのような荔湾区で、なぜ「私伙局」が重視され、また興隆しはじめたのだろうか。その原因について、荔湾区の政治経済的情勢を、歴史的景観再生の諸政策の観点から探っていくことにしよう。

(3) 荔湾区における都市景観計画と音楽言説の生産

荔湾区は、図2からも明らかであるように、広州市の都心部に位置する。こは、旧広州城（図2の越秀区とおおよそ範囲が一致する）の西門外に位置していたので、「西関」という俗称で親しまれてきた。西は、清代に「中国四大名鎮」と呼ばれた佛山市と境を接している。

荔湾区が中国史において注目を集めるようになったのは、清代中頃の乾隆帝期である。1757年11月、乾隆帝は海禁政策を実施し、海外と交易できる港口を広州市のみとした。そして、交易の地として選ばれたのが城の西側に位置する西関地区であった。西関地区はその後、民国期に至るまで海外取引の唯一の窓口として栄え、西関は商業の町として豊かな地区であり続けたという⁽²²⁾。民国期には高級茶館や西関屋敷と呼ばれる豪邸が立ち並び、政治家の主な居住地であった東山区一帯とともに、広州市のなかでも、とりわけ富裕な地区として知られるようになっていた。

さて、民国期にはかように繁栄を続けてきた西関地区であったが、1940年代に入ると日本軍の侵略および共産党政権による土地改革を通して、広州市のなかでも特に経済的に秀でた地域ではなくなった。1979年の改革・開放政策以降、荔湾区となった西関地区は商人の町としての性格を取り戻したが、越秀区や東山区、および新興の天河区に経済力の面で及ばなくなっている。それゆえ、荔湾区は1990年代中葉より、「文化」を前面に押し出すことで都市における競争に打ち勝つ政策を推進してきた⁽²³⁾。つまり、かつて裕福であった文化的諸要素を「西関文化」として保存、再生させる政策をここ10年余りの間、実施するようになっている。そのなかで特に注目できるのは、荔湾区の「特色」として考えられている建築環境および自然環境を保存・再生し、同時にそれらと密接に関係する生活様式、民俗活動の再生を図ってきたことである。これは、ユネスコが提示した定義に基づくと、文化的景観の再生の動向であると言えるだろう。

かような文化的景観再生の政策において、音の景観の再生もまたその一環として含まれてきたことは興味深い。すでに見てきたように、民国期の荔湾区一帯（西関地区）は東山区一帯（東山地区）とともに富裕な地区として知られ、これらの地区では茶館や屋敷などで広東音楽の演奏が盛んであったといわれる。こうした広東音楽の音を伴った当時の西関地区の文化的景観をめぐる描写は、書籍やメディアにおいても表象され続けている⁽²⁴⁾。同時に、民間においても、「西関は広東音楽の栄えてきた地区である」という言説が、現在、広がるようになっている。今では、かつての西関地区の広東音楽をめぐる景観は、広州市の政府や学者たちが表象しているだけでなく、少なからずの市民の記憶に刻まれてもいる。荔湾区を広東音楽の中心地とみなす言説はまた、「広東音楽の故郷」なる称号を1998年に国家より授与されたことで、権威づけをされている。

3. 西関社区における「私伙局」の組織と活動

(1) 西関社区における「私伙局」の組織化

さて、本稿では荔湾区に属す西関社区（仮称）を具体例にとりつつ、「私伙局」がいかに興隆していったのかについて検討してみよう。

目下、約760万人の人口を抱える広州市にあって、荔湾区の人口は約50万人である⁽²⁵⁾。荔湾区はその下部に14の「街道」（区の直轄にある政治単位）をかかえており、「街道」はさらに「社区」と呼ばれる生活共同体を管理している。広州市における「社区」の人口はおよそ5,000名であるが、西関社区もその例外ではない。また、荔湾区および西関社区は高齢者人口の割合が特に高く、区政府にとって、こうした高齢化問題は解決を要する問題となっている。

荔湾区政府はこうした訳で、高齢者問題の一端を解決することも兼ね、西関社区にて「私伙局」の演奏を積極的に推進してきた。少なくとも珠江デルタにおける一般的な傾向として、広東音楽は、60歳以上の高齢者もしくは40歳以上の中年層が好む対象となっている。40歳未満の青年層、少年層はむしろ香港や台湾に発する流行音楽を好んでおり、広東音楽を退屈なものと捉えている。西関社区において筆者が青年層からよく聞いた話によると、「広東音楽はリズムが遅く、また1曲の演奏時間が30分以上と長いので退屈である」とのことであった。だが、幼少期より広東音楽に慣れ親しんできた高齢者層にとっては特に、幼少期の記憶を懐かしむメロディでもある。それゆえ、高齢者への娯楽提供という建前のもと、政府は「私伙局」の推進を通して過去の記憶の再生を試みている。かつて荔湾区政府の関係者が述べていたように、こうした文化的景観の再生は、ナショナリズムを高揚し、また華僑の投資を招く手段ともなりうるからである⁽²⁶⁾。

西関社区では、高齢者層を主なターゲットとした「私伙局」が、2つの地点で推進されている。1つは、Uクラブ（仮称）と呼ばれる高齢者福祉施設である。これは1998年に香港Uクラブが区政府と提携して西関社区に構えた施設であり、西関社区を中心として300人以上の会員を抱えている。もう1つは、西関社区の文化センターであり、ここで4つの「私伙局」が結成されている。文化センターでは、社区の高齢者に娯楽を提供する名目で1990年代中葉より広東音楽のプログラムを取り入れ、演奏者たちに会場を無料で提供してきた。目下、これら4つの「私伙局」により広東音楽（および広東劇）の演奏がほぼ週5日催されており、西関社区および周辺の社区に居住する高齢者たちに娯楽を提供している。文化センターでは、広東音楽以外にも、書画、体操などのプログラ

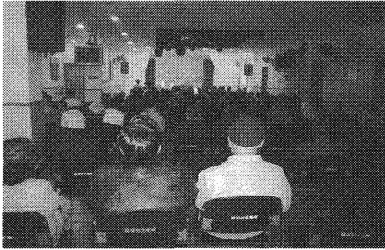


写真1 文化センターにおける「私伙局」の観客

ムが提供されているが、なかでも広東音楽は最も高齢者の人気を集めているプログラムである。写真1に見るように、演奏の際には、毎回、中高齢者たちで満席になる。

Uクラブにおける「私伙局」の考察は別稿に譲るとして、本稿では文化センターにおける「私伙局」についてみ

ていくことにしよう。すでに述べたように、文化センターにおいては4つの「私伙局」が結成されているが、それぞれを α 楽団、 β 楽団、 γ 楽団、 Ω 楽団と呼ぶことにする。筆者の調査に基づく、 α 楽団と β 楽団は荔湾区育ちの本地人によって創始されており、いずれも文化センターにて参加する以前に楽団を結成している。それに比して、 γ 楽団は広東省梅州市生まれの客家人によって、近年になって組織された。その他、 Ω 楽団は「河星楽社」と呼ばれる荔湾区政府直轄の楽団の一派であった⁽²⁷⁾。筆者は、 Ω 楽団以外の3つの楽団について、「私伙局」組織の動機、過程、および結成以来の活動内容に関してインタビューと観察を実施することができた。次に、 α 楽団と γ 楽団の例をとりあげ、その詳細を紹介する。

(2) α 楽団——西関本地人による「私伙局」の組織と活動

α 楽団は、1959年に荔湾区にて成立した。創始者であるA氏はシンガポールからの帰国華僑であったが、少年期を荔湾区にて過ごした。A氏は大学時代に広東音楽のバンドを結成した後、音楽の道に進み、1959年には仲間と金を出し合って自宅で楽団を結成した。A楽団は結成後、数名の仲間とともに余暇として演奏を楽しんできたが、文化大革命の波にさらされて一度は中止することになった。

A氏は、改革・開放政策が始まるや否や、すぐに仲間を集めてバンドを再結成した。だが、文化大革命の波乱が収まったばかりで経済的に余裕がなく、楽団の規模は大きくはなかった。1980年代のA楽団の写真をいくつか拝見し話を

伺うと、楽団員は当時10名程度であったと述べた。また、A氏の住む西関屋敷で日頃から仲間内と演奏をしていた他、春節の時などの祝賀時にも、特別に演奏がなされてきたという。

ある楽団員であるB氏（女性、60歳代）が筆者に語ったところによると、1980年代の α 楽団は居民委員会（現在の社区政府とおおよそ一致する）と一定の連絡はあったようだが、記録を見る限りにおいて特に政府のために作詞・作曲・演奏をしてきたわけではない。非凡な音楽的才能をもつA氏を中心として、あくまで広東音楽の演奏を楽しみ、またレベルを向上させることに主な目的がおかれてきたという。 α 楽団は荔湾区の「私伙局」のなかでも屈指の実力を誇る楽団となっており、同楽団は、かつてプロの音楽家を3名輩出した。

さて、外部から観察する限りにおいて、こうした α 楽団の活動内容に明らかに変化がみられるのが1990年代の中葉である。1990年代の中葉と言えば、ちょうど市場経済化政策（1992年）が採択された直後であり、またすでに見てきたように荔湾区政府が都市の「特色」を醸成するために、文化政策を推進しはじめた時期である。この頃、西関社区の文化センターは、「私伙局」の諸楽団に無料で活動の場所を提供するようになり、文化センターにおける「私伙局」の奨励をなすようになった。荔湾区のような土地価格の高い都心部であると、広東音楽を演奏する場所を借用する費用だけでも馬鹿にはならない。楽器を揃えるだけでも高額な資金が必要であるので、都市における場所代の無料提供はそれだけでも、少なからずの楽団を集める魅力をつくりうる。 α 楽団の場合、A氏の西関屋敷が都市改造の過程で取り壊されたため、活動の場所を確保するのに苦労してきた。そういう訳で、 α 楽団は1997年より、文化センターにて活動をはじめようになったのである。

2002年に書かれた α 楽団の手記を見ると、 α 楽団は、文化センターにて演奏をはじめた1990年代後半あたりから、区政府の主催する数多くの政治キャンペーンに参加しはじめている。その代表的なキャンペーン活動は、たとえば、共産党建設80周年記念での演出、徴兵宣伝活動での演出、計画出産活動での演出、緑化推進運動での演出、全国身体障害者デーでの演出、慈善会成立を祝う演出、西関歩行者天国の開通式における街頭演出である。また、深圳市など、外地に

出かけて演奏をおこなうこともあった。同手記によると、「街頭演説では毎回100名を超える観衆がいた。また、劇場での演出では数百名を超える観衆がいた。文化センターでは毎週、2度演出し、観衆は毎回100名を超えている。総じて言えば、数万人のために演出してきた」という。その他、 α 楽団は香港・マカオの同胞や海外華僑が訪れるごとに、演出活動をおこなってきた。文化センターのスタッフも認めていたように、彼らの演奏は今や、社区と華僑を結びつける、重要なパイプ役となっている。

こうして見ると、 α 楽団の活動内容は1990年代中葉より区政府の政治経済的欲求に足並みをそろえて展開している、といえなくもない。だが、その反面、筆者が調査の過程で常にかかかってきたのは、以上の明らかな変化があるにもかかわらず、 α 楽団成立の初期より参与している楽団員たちが、「自分たちのやっていることは昔と何の変りもない」と主張していたことである。この矛盾とも受け止めることができる発言は、何に起因しているのだろうか。

上記の発言のなかで、とりわけ興味深いのは、彼／彼女らが区政府の要求に従っておこなっている街頭演出などの政治キャンペーンを、「任務」という言葉で括っていることである。すなわち、政治キャンペーンは、時代の要請に従って足並みをそろえているだけで、それを、「われわれのやり方」とは異なるとみなしているのである。 α 楽団の中心メンバーは、金銭面の事情などから組織を維持するために、政治キャンペーンに参加することが必要であると考えている。しかし、それは彼／彼女らにとっては「ニセモノ」の演奏であり、真なる演奏とは、かけ離れたものと認識している。

このことは時として楽器の使い方に表れている。筆者が α 楽団において気づいたのは、彼／彼女らが使っている楽器が、必ずしもわれわれが想像する伝統的な広東音楽のそれではなかったということである。2007年の時点で観察できる限りにおいて、 α 楽団は、電子ピアノやトロンボーンなどの西洋楽器を導入して演奏をしてきている。だが、街頭での演奏の際には、できるだけ一般的にイメージされる広東音楽を演出するため、伝統楽器が多用されている。このことについてB氏は、次のように解説する。「私たちの楽団の目的は、あくまで広東音楽を個人の余興として楽しむことです。かつて仲間内で演奏してきたとき、

西洋楽器を取り入れた方が、より味わい深い音色が出ることに気づくようになりました。そこで常に西洋楽器を導入しつつ、自分たちの音をつくりだしてきました。時代に合わせて自分たちのやり方を変えていくのは当然のことです。私たちが仲間内でおこなってきた『私伙局』とはこのようなものなのです」⁽²⁸⁾と。

ここで注目すべき点は2つある。第1に、「自分たちのやり方を時代に合わせて変えるのはむしろ自然なこと」であると考えられており、それはいくら政策的な要求によって引き起こされたとしても、過去のやり方の断絶にはつながらないということである。第2に、そうした個々人が室内で余興として広東音楽を楽しむのが「私伙局」であり、それは街頭で演出される政治キャンペーンとは明確に区別されている。すでに見てきたように、「私伙局」という言葉自体が近年になって政治的につくりだされた概念である。しかし、 α 楽団では、それを、昔ながらのやり方を続ける楽団と理解しており、政治的な「任務」と対比しているのである。

(3) γ 楽団——客家人による「私伙局」の組織と活動

α 楽団が1959年に結成されていたことと比べると、 γ 楽団の結成は最近のことである。 γ 楽団は、東山区に住むC氏（女性、50歳代）によって2000年に結成された。C氏は広東省東部の山岳地帯に位置する梅州市梅県に生まれ、1歳の時に広州市にやってきた。2007年5月24日にC氏にインタビューした際、彼女は、生い立ちから γ 楽団の結成に至るまでの半生について筆者に以下のように語った。

私は梅県で生まれた生粋の客家人⁽²⁹⁾です。しかし、梅県は男尊女卑の社会ですので、私の両親は女兒の誕生を喜びませんでした。ですので、私は1歳の時に広州市白雲区の村に養子に出されました。義父母はあまり良い人ではなく、私は子供の頃からずっと村の工場で働かされていました。ようやく学校に通えるようになったのは10歳の時です。私は小学校で4年間勉強してから14歳の時に村の中学校に入学し、広東音楽を習い始めまし

た。しかし、中学校に入ってから3年後に文化大革命が起きたので、私は広東音楽の勉強を諦めざるをえませんでした。それから私は40歳過ぎまで工場労働に従事してきました。しかし、私はずっと広東音楽が忘れられず、退職後、荔湾区の音楽学校で再び広東音楽を学びはじめました。10年ほど前のことです。その後、私は7年前にγ楽団を結成しましたが、それまでにいくつかの困難がありました。まず、最初に私は、私の住宅がある東山区で楽団をつくろうと思っていたのですが、楽団を共にしてくれる仲間が見つかりませんでした。また、東山区の社区にも広東音楽を演奏する場所を提供して欲しいと頼んだのですが断られました。そうこうしているうちに、私は、荔湾区には広東音楽の愛好者が多いと聞き、また西関社区が無料で活動の場所を提供してくれたので、荔湾区の音楽学校の仲間を中心としてγ楽団を結成しました。今では私たちは、西関社区の文化センターの他に、荔湾区の別の社区でも活動をおこなっています。

以上のC氏の話のなかには注目すべき点が2つある。第1は、彼女がまず東山区にて「私伙局」を結成しようとしたことである。すでに述べたように、東山区は荔湾区と同様に民国期には富裕層が住むところとして知られ、広東音楽も流行していた。とりわけ、富裕層が集住していた東山区の西部では民国期より広東音楽に触れてきた高齢者層も少なくはなかった。また、彼らが路上や公園で広東音楽の演奏をしている姿は今でも見かけることができる。だが、東山区は現在、広東音楽を積極的に推進してはならず、それゆえ活動場所の提供もしくは音楽学校の設定を、さして重視はしていない。加えて、東山区の東部は改革・開放後に開発されたニュータウンであり、広州市の内外から集まった外来者が主に居住している。それゆえ、ここでは社区の文化活動として広東音楽がとりあげられることも少なく、広東音楽の仲間を探すことも困難となっている。このように、東山区は改革・開放政策以降、広東音楽愛好者を引きつける磁力をますます弱めているのである。C氏は東山区のなかでも東部の居住者であり、ここで広東音楽の仲間も社区の協力も得られなかった事実は、彼女の目を外に向かわせる結果を招いている。

第2に注目されるのは、C氏が荔湾区にてγ楽団を結成した理由として「荔湾区には広東音楽の愛好者が多い」という言説を耳にし、それを真に受けていたということである。前節の説明を繰り返すことになるが、荔湾区は政府が「私伙局」の名を用いて広東音楽を推奨してきただけでなく、「広東音楽の故郷」としての宣伝をなしてきた。この言説は、荔湾区を超えて広州市の、少なくとも四老城区の民間には流布しており、C氏を荔湾区に向かわせる磁力ともなっている。また、広東音楽の学校も荔湾区に多く建てられているので、この区には近年、広東音楽の愛好者が多く集まるようになってきている。実際、γ楽団は広東音楽校時代の仲間を中心として結成されているが、20名ほどの成員のうち、約半数が荔湾区の外からの出身者で占められている⁽³⁰⁾。

さて、上記のような動機とプロセスを経て結成された後、γ楽団はどのように活動を展開してきたのだろうか。2000年に結成されて以来のγ楽団の活動記録を見ると、α楽団と同様に、西関社区の文化センターなどで日頃演奏している以外に、政治キャンペーンでの演出にも参与している。具体的には、慈善会における演出や養老院への訪問、そして香港・マカオの同胞および華僑との交流を目的とした演出などである。とりわけ、γ楽団は、香港・マカオの同胞と交流する架け橋となっており、筆者が把握する限りにおいて、2006年におこなわれた交流活動は15～16回にもなる。その他、γ楽団は政府の要求に応えるだけでなく、デパートのイベントに招かれて演奏することもある。

γ楽団がα楽団と異なるところは、C氏をはじめとする成員が政治キャンペーンへの参加を「任務」と考えておらず、それゆえ「自らの演奏」と「外の演出」とを使い分けていないことにある。彼女らは、政治キャンペーンにて街頭演出



写真3 文化センターにおける演奏

することは、むしろ多くの者に演奏を聴いてもらえる良い機会だと考えており、α楽団のように楽器の使い分けもしていない。また、デパートのイベントにも積極的に演出しにいき、収入を得ている。

このように見ると、γ楽団は商業化

された「私伙局」のひとつのモデルのようにみえるかもしれないが、C氏はγ楽団を、あくまでも商業化された広東音楽の楽団と区別している。「私伙局」とは、C氏によると、あくまで自分で資金を集めて仲間内で開く広東音楽の楽団である。それゆえ、γ楽団では、楽器と衣装を自分で購入するのは勤めだと考えている。広東音楽では、楽器はもとより、それに見合った衣装（写真3にて左手の人物が纏っているそれ）を買い揃えるのにも高額な資金を必要とする。この種の衣装は、高いものは1万元（日本円で15万円相当）以上するといわれる。γ楽団では、初めは手縫いの衣装で代替していたが、街頭演出などを通して得られた資金を使って徐々に自分たちで質の高い衣装を買い揃えるようになったという。こうした訳で、γ楽団は、自分で衣装も楽器も買わないのに「私伙局」の名を用いる広東音楽の名を使う楽団やコンテストに、強い反感の気持ちをもっている⁽³¹⁾。

4. 比較と考察——言説と〈場〉の磁力

本稿ではこれまで、広州市を中心とする「私伙局」興隆の現象をみてきた。これらの諸現象より明らかであるのは、少なくとも広州市の「私伙局」ブームにおいては政治経済的な力が重要な作用をなしてきたということである。

ただし、ここで注意したいのは、政治経済的な影響力を「私伙局」ブームの原因として絶対視することはできないということである。たとえば、経済力およびそれに伴う生活水準の向上について、中国の学者たちは、生活水準（下部構造）が高まるほど「私伙局」という高級文化（上部構造）が興隆するという唯物史観的な論理を打ち出してきた。確かに「私伙局」の活動をおこなうためには楽器代、衣装代、場所代を含む多額の資金が必要になってくるため、経済力および生活水準の向上は「私伙局」の活動に欠かせない。しかし、それではなぜ広州市において、荔湾区よりも経済力のある東山区や天河区にて「私伙局」がそれほど着目されていないのだろうか⁽³²⁾。なぜ荔湾区において「私伙局」が結成されはじめているのだろうか。経済力および生活水準の向上だけでは、それを説明できない。

広州市の事例において、経済成長よりもむしろ重要なのは、都市景観再生の

政策をはじめとする政策的側面である。α楽団にしてもγ楽団にしても、過去の景観イメージを高齢者層や同胞・華僑に想起させようとする政治キャンペーンに、介入するよう促されていた。今や西関社区において「私伙局」は、ただ広東音楽を演奏する団体ではなく、景観政策において用いられる「資本」となっている。さらに、荔湾区における「私伙局」の興隆は、同区を広東音楽の中心地とする言説と相乗して、外地の広東音楽愛好者を引きつける磁場を形成している。西関社区のような地域共同体のレベルから「私伙局」の興隆を捉える場合、こうした言説ともなった磁場の力は決して見逃すことができない。

フランスの人類学者であるジェラルド・アルタブは、人びとが対話を通して築き上げる社会空間に着目している⁽³³⁾。この社会空間を仮に〈場〉と呼ぶとすると、〈場〉には特定の望ましさを兼ね備えた意味が付与されている。この概念を西関社区の事例において用いるならば、荔湾区のあちこちには「広東音楽の故郷」としての意味が付された〈場〉が存在している。そこは広東音楽がかつて民間にて流行していた景観を想起させる〈場〉であり、そして、「私伙局」は民間で資金を出し合って金を出し合う〈場〉であるという意味が、景観政策を通して形成されているのである。そして広東音楽の愛好者は、かような意味を伴った言説を聞きつけることで、この〈場〉に参入しはじめている。

しかし、他方で注目に値するのは、同じ西関社区に属していても、この〈場〉に参入しようとしないう者たちが存在することである。これまで西関社区における「私伙局」の結成について紹介してきたが、5,000人前後の人口を抱える西関社区において、広東音楽の演奏者もしくは聴衆となるのは、一部の市民層に限られている。一言で西関社区と言っても、そのなかには年齢、職業、出自の異なった者がさまざまに存在しており、とりわけ西関社区内部には、市民と村民という集団に大きく二分されている。前者は多数派であり、主に1949年の中華人民共和国の成立以降に西関社区にきた層である。また、後者は少数派であり、1949年以前は農耕や商売を営んだ土着層である。そのうち、民国期に広東音楽に参与してきたのは市民側であり、村民側はさして参与してこなかったといわれる。

筆者がフィールドワークを通して気づいたのは、市民と村民は慣習的な

〈場〉を同時に構築にきており、また、それぞれの〈場〉のあり方に違いがみられるということである。たとえば、一部の市民の間で築かれる〈場〉においては、民国期に広東音楽が流行し、幼い頃からそれを耳にしてきたという語りがしばしばなされる。それゆえ、区政府が提示する「広東音楽の故郷」なる言説を相対的に素直に受け入れることができ、それは「私伙局」の結成や誘致に有利にはたらく結果となっている。だが、他方で村民側が築きあげる〈場〉においては、広東音楽および「私伙局」は自らと関係ないものとして忌避されている。村民たちの〈場〉ではしばしば、次のような語りがなされる。「西関社区には文塔と呼ばれる筆の形をした塔があり、住民の文才を操ることができる。文塔の上手にいる住む市民たちは、文化があるので広東音楽を演奏することができる。しかし、私たちは文塔の下手に住んでいるから、広東音楽とは縁がないのだよ⁽³⁴⁾」と。こうした村民側の〈場〉におけるコミュニケーション様式は、市民とは異なり、「私伙局」の演奏者もしくは聴衆になる妨げとなっている。事実、西関社区の文化センターには、演奏者としてであれ聴衆としてであれ、村民の姿を見かけることはほとんどない。というも、〈場〉が異なる、すなわち〈場違い〉になると村民たちによって考えられているからである。

言うまでもなく、村民と市民とは同じ社区共同体に属しているので、政策的な基盤を共にしている⁽³⁵⁾。だが、西関社区の村民と市民の比較を通して言うことは、たとえ政策的な基盤を共有していようと、各々の〈場〉において歴史的に形成されてきたコミュニケーション様式に応じて、広東音楽がいかに受け止められるか、また「私伙局」にいかに参加するかが異なってくるということである。換言すれば、「私伙局」ブームの重要な原因として確かに政治経済的影響力は重要な作用をもっているが、他方で、よりマイクロな次元において各々の〈場〉が、それをいかに理解し受容するかが核心的な問題となってくる。

〈場〉の意味に応じた政治言説の理解・受容という問題設定は、本稿で取りあげてきた α 楽団と γ 楽団についても妥当する。すでに見てきたように、 α 楽団は、1990年代中葉より政治キャンペーンに参加しはじめているが、他方で自分たちの属する〈場〉のコミュニケーション様式に合わせて、自己の「私伙局」を追求し続けている。それゆえ、政治キャンペーンに合わせて活動をおこなっ

てはいるものの、それを〈ニセ〉の演出として自己のやり方と区別している。たとえば、この〈場〉においては、しばしば「私伙局は民国期に結成された」とメディアは報道しているが、あれは嘘だと言われる。彼／彼女らは、「文化大革命以前は屋外で堂々と演奏することができたから、屋内で演奏する必要はなかった。文化大革命により広東音楽の演奏が禁じられてから、はじめて屋内でこっそりと演奏する『私伙局』が誕生したのだ」というのである。つまり、 α 楽団において「私伙局」は、あくまで屋内で余暇として楽しむものであって、街頭でおこなわれる政治キャンペーンは彼／彼女らの〈場〉の原理から外れる、〈ニセモノ〉であるとしか理解されないのである。

だが、 γ 楽団による「私伙局」は、 α 楽団のような二面性をもちあわせていない。というのも、外地人によって結成された γ 楽団には、2000年の楽団結成以前には固有の〈場〉をもっていなかったからである。それゆえ、 γ 楽団では、荔湾区政府が付与したコミュニケーション様式に依拠して2000年以降、〈場〉を形成するようになっている。つまり、 γ 楽団は、荔湾区が広東音楽の中心であるとする言説に引き寄せられて、この地にて楽団を結成しただけではない。区政府の提示する「私伙局」をめぐる言説もそのまま受け入れている。つまり、区政府は近年、「私伙局」を推進し宣伝しているが、自分で資金を出して結成される楽団を「私伙局」と名づけているだけで、屋外で演奏されるか屋内で演奏されるかについてはそれほど強調していない。それゆえ、政治キャンペーンの際に「私伙局」は、屋外で演じられることもある。 γ 楽団で強調される「私伙局」の姿もまた、自分たちで資金を出すことにあり、屋外での政治キャンペーンの参加には何の疑問も付されてはいない。その意味で、 α 楽団における「私伙局」の理解、および活動の細部について差異が見られるようになっている。換言すれば、 γ 楽団はかように「私伙局」に関する政府の言説を真に受けることで、結果的に景観再生政策を経済面で支援することになっている。

5. おわりに

以上の考察に基づくと、次のことが言えるであろう。まず、文化的景観再生の政策に代表される政策的要因は、一方では「私伙局」の興隆に大きな刺激を

与えている。それは政治言説として流布し、 γ 楽団の結成にみるように外地の広東音楽愛好者を引き寄せている。しかし、他方で、「私伙局」の興隆は、共同体内に多数に存在する〈場〉のコミュニケーション様式とどのように辻褄を合わせるかという問題が、それとは別の問題として浮上している。つまり、村民のように政治言説と相容れないコミュニケーション様式を内在する〈場〉においては、「私伙局」は興隆しえない。だが、市民のように政治言説と、ある程度の整合性を具えうるコミュニケーション様式を内在する〈場〉においては「私伙局」は興隆しうる。後者について α 楽団の事例から判断すると、政治言説は、広東音楽の演奏それ自体を時代に合わせて維持させるために「表面的に」取り入れられる。だが、他方では「使い分け」をおこなうことで、自己のやり方を持続させている。すなわち、外部環境より刺激を受け、それに外皮を被せつつ、内核の意味と価値を維持するという、「調整」の戦術がおこなわれているのである。

以上の考察から導き出した見解をサウンドスケープ論に再度言及することで、本稿を閉じるとしたい。

冒頭で論じてきたように、サウンドスケープとは、聴覚によって想起される音の景観である。広州市では目下、広東音楽や「私伙局」は、仲間内で演奏される「特色」ある景観として宣伝されている。しかしながら、こうした「特色」ある音景観は、むしろ荔湾区の文化的景観再生政策という脈略のもと、華僑政策など各種の政治キャンペーンに「資本」として用いられてきた。この意味で、もともと「内からの」デザインとして編み出されてきたサウンドスケープは、広州市においては政策的な道具としてむしろ転換されている側面を窺い知ることができる。さらに、広東音楽と「私伙局」をめぐる諸々の政治言説は、 γ 楽団など外地の楽団を吸収する磁場を形成しており、その磁場によってサウンドスケープは再生産されている。

しかしながら、西関社区における「私伙局」の事例から明らかであるのは、政治経済的な影響力のみからサウンドスケープの興隆を把握するのは不十分であるということである。 α 楽団の例に見るように、現地共同体の楽団は、組織の維持のために政治的な言説に合わせた演奏をしうる。しかし、それは「任務」

として必要ではあるが「真正ではない」演奏と考えられている。α楽団にとって、政治言説によって与えられた演奏の〈場〉は、組織を維持する重要な外的刺激である。しかし、これは自分たちのやり方を変更するものではありえない。というも、他方で自己の「昔から変らない」と考えられる演奏を文化センターにおいておこない、自己の〈場〉を保っているからである。すなわち、外的刺激に応じて「調整」をおこないつつ、政治経済的な欲求には完全には操作されない世界を維持している。

以上からさしあたり下すことができる結論は、サウンドスケープの創造は、ヤヌスの顔に似ているということである。すなわち、一方では都市の諸政策は、「私伙局」などのサウンドスケープを創造する重要な源泉である。だが、他方で、それに収斂されない複数の〈場〉に基づくサウンドスケープもまた存在している。だが両者は必ずしも相反しない。というも、個は、両者を渡り歩きながら自己の世界をつくりあげていくことができるからである。サウンドスケープの創出の研究において、両者の相互作用を解読していく作業は必須である。珠江デルタの他の地域の事例を研究しながらそれを解読していく作業は、筆者の次なる課題となっている。

注

- (1) 岩宮 1992、宮川ほか 1999: 427.
- (2) 本稿では、景観 (landscape) を物理的環境と区別している。すなわち、物理的環境は客観的に存在しているのに対し、景観は諸個人や諸集団の記憶に応じてさまざまに「切り取られる」主観的な見方である。
- (3) Schafer 1977. シューファーは、産業革命に始まる近代化の波によって自然の音が淘汰され、特定の音だけが芸術文化としてコンサートホールに押し込められるようになった歴史を反省している。「自然」としての音を再び見つめなおすとともに、それを「文化」としての音楽と結びつける必要性を提唱するようになったのはそのためである。また、シューファーがサウンドスケープを提唱するようになった社会的背景には、エコロジー思想の興隆があったことも忘れるべきではない。すなわち、近代化によって失われていく自然の音と景観を救い上げようとするシューファーの理念は、自然の保護をモットーとするエコロジー思想と根底でつながっていたのである。サウンドスケープと環境保護主義の関係性については、

鳥越 2004: 26, 206を参照のこと。

- (4) フェルド 2000: 39.
- (5) Feld 1996a, フェルド 2000. Stewart and Strathern 2003, 2005も、音景観と身体感覚の問題構成について言及している。
- (6) Schafer 1977, 邦訳20頁。
- (7) Harvey 1990, 邦訳347, 380頁。
- (8) 李によると、「私伙局」は、最初は広東劇の愛好者が組織したのではなく、広東音楽とその演奏を主な内容としていた。広東劇は広東音楽と密接な関係があるために、後に付け加えられたのだという [李計寿 2006: 258]。
- (9) 李計寿 2006: 258, 広州日報2006年12月6日、A 5面。
- (10) 広州日報2006年12月6日、A 5面。
- (11) 潘 1996, 何 2002, 羅 2005, 李計寿 2006ほか。
- (12) 潘 1996: 21, 何 2002: 10, 李計寿 2006: 261ほか。
- (13) 何 2002: 8-10.
- (14) 陳超平 2005: 14.
- (15) 『広東百科全書』(中国大百科全書出版社、2008年) 上巻、155頁。
- (16) ただし、本稿で示した10区は2005年以降、変化がみられる。2005年4月28日、越秀区と東山区が合併して新越秀区となり、荔湾区と芳村区が合併して新荔湾区となった。その他、番禺区が南北に分かれて番禺区(北部)と南沙区(南部)となり、白雲区が東西に分かれて白雲区(西部)と羅崗区(東部)になった。しかし、第一に本稿は2005年以前の状況についても多く言及していること、第二に市民が前行政区画を意識する傾向がまだ強いことから、混乱を避けるために2005年以前の行政区画を便宜的に用いている。
- (17) 陳超平 2005: 13-14.
- (18) 何 2002, 盧 2005, 李計寿 2006: 261.
- (19) 沙湾鎮では、鎮政府が広東音楽を推進しており、三稔庁という広東音楽の堂を保存するなどの政策をおこなってきた。当地では、社区居民委員会にて勤務する女性を筆頭にして「私伙局」が結成されており、2007年現在、週末になると三稔庁にて広東音楽の演奏がなされている。その他、沙湾鎮の小学校では、広東音楽の授業が編入されるようになっている。沙湾鎮の社会文化的な概況については、吉田 2006を参照のこと。
- (20) その他、荔湾区の小学校においても広東音楽のカリキュラムが導入されている。荔湾区政府の公式ホームページによると、錦龍社区に位置する三元坊小学校は特に広東音楽の教育に熱心で、「広東省民間音楽教育見本学校」の称号が授与されている。紹介によると、同小学校では、毎日午後4時から5時まで広東音楽の訓

練をしており、80%以上の児童が2種類の楽器を演奏できる。

- (21) 沈 2002: 14.
- (22) 梁 2004.
- (23) 周軍 2004: 57.
- (24) たとえば、西関地区を舞台とした連続ドラマ『西関大少』の出だしは、西関小姐が広東音楽を歌う場面から始まっている。西関の巷や住居において西関音楽が流されるとする景観モデルは、新聞やテレビを始めするメディアを通して、視覚的に広州市民に宣伝されている。
- (25) 広州市荔湾区地方志編纂委員会辦公室（編）2004: 10。2006年10月16日の『中国共產党新聞』によると、西関社区の高齢者人口は1,000名以上おり、社区人口総数の5分の1を上回っている。
- (26) 文史組 1996: 15.
- (27) 河星楽社については、彭 2001を参照のこと。河星楽社のように政府が直に結成した「私伙局」は、荔湾区では少数派である。しかし、荔湾区の85%の「私伙局」は、各種政治キャンペーンに参加するなど、何かしらの形で政府とか関わりをもっている [李小玲 2002: 15]。本稿で紹介している α 楽団と γ 楽団もまた、そのような「私伙局」である。
- (28) 2007年5月25日に実施したインタビューに基づく。
- (29) 客家人は、中国華南地方を中心に居住する漢民族のサブ・エスニック集団である。広東省では梅州市を中心に居住しており、潮州市を中心に居住する潮汕人、および広州市を中心に居住する広府人（本稿では「本地人」と表現している）と並んで広東三大エスニック集団の1つに数えられる。
- (30) 他方で α 楽団は、1990年代前葉まで、10名余りの成員で活動をおこなっていた。当時はそのほとんどが荔湾区の出身者であったが、21世紀に突入する頃になると成員構成に変化がみられている。成立当初の旧メンバーは病死などの理由で離脱し、今は天河区や海珠区など他の区の成員も少なからず抱えるようになっている。ただし、年齢はほとんどが50歳以上で、若者を引きつける対策は特に行っていない。
- (31) たとえば、広東涼茶（漢方薬の入ったお茶）のチェーン店である黄振龍は近年、「私伙局」という名前でコンテストをおこなっている。しかし、このコンテストに参加する楽団は、必ずしも自分で資金を出して仲間を集め楽器や衣装を購入していないため、C氏は「それは私伙局ではない」と怒りを露にして批判している。
- (32) 一人頭のGNP数値をみても、荔湾区は東山区より生産高が劣っている。また、同じ珠江デルタでみても、広州市に次ぐGNP数値を誇る深圳市には、30楽団しか「私伙局」が形成されていない。他方で、江門市は、珠江デルタの9都市のなか

でGNP数値こそ第6位であるが、「私伙局」は200楽団も結成されており、広州市（280楽団）、佛山市（210楽団）に次いで3位となっている。

- (33) Althabe 1998.
- (34) 文塔は、人間の命運を司ると考えられているため、しばしば学術やメディアによって風水の観点から説明されることがある。筆者も当初は、文塔の風水にまつわる話の一環としてこの語りを聞いていた。しかし、大多数の村民は、文塔の果たす役割を風水であるとは、2007年の段階では説明していない。同様に、廟の高低や門の幅にまつわるしきたりについても、「礼儀」や「命運」などの言葉で代替されることが多かった。
- (35) 村民は土地の権益から得られる収入により、むしろ市民よりも経済的に潤っている。詳しくは、河合 2008:125-126を参照のこと。

参考文献

〈日本語〉

- 岩宮真一郎 1992「オーディオ・ビジュアル・メディアによる音楽聴取行動における視覚と聴覚の相互作用」『音響学会誌』48:146-153
- 河合洋尚 2008「広州市西関区域における竜舟祭の市場経済化——都市景観再生下の象徴資本」『宗教の市場経済化——中国東南部のコンテクスト分析』（佐々木伸一代表、科研研究費成果報告書）
- 鳥越けい子 2004『サウンドスケープ——その思想と実践』（第三版）鹿島出版社
- フェルド、スティープン 2000「音響認識論と音世界の人類学——パプア・ニューギニア・ボサビの森から」（山田陽一訳）山田陽一（編）『自然の音・文化の音——環境との響きあい』昭和堂
- 宮川雅充、鈴木真一、青野正二、高木興一 1999「視覚情報が種々の環境音の印象に与える影響」『日本音響学会誌』56:427-436
- 山岸美穂・山岸建 2004『音の風景とは何か——サウンドスケープの社会誌』日本放送出版協会
- 吉田世津子（編）・浮田恵・中条健吾（著）2006『四国学院大学応用社会学部社会調査実習B報告（9）——番禺区沙湾鎮』（中国語部分は河合洋尚訳）

〈中国語〉

- 陳 超平 2005「試論民間樂社の歴史地位」『南国紅豆』6:13-15
- 陳 鴻鈞 2003「広州西関在粵劇曲芸群集文化活動的重要地位」『嶺南文史』4:33-36
- 何 平 2002「從“鐘村現象”看民間樂社的存在与發展」『南国紅豆』6:8-10
- 広州市荔湾区地方志編纂委員会辦公室（編）2004『広州市荔湾区商貿文化旅遊年鑑』廣東經濟出版社

- 黃愛東西 1999『老広州』江蘇美術出版社
- 李 計籌 2006『粵劇与広府民俗』中山大学中文系博士論文
- 李 小玲 2002「荔湾区“私伙局”的生命力」『南国紅豆』6:15-16
- 梁 基永 2004『西関風情』広東人民出版社
- 盧 国堯 2005「進一步發展、築固、提高民間樂社——番禺鐘韵樂社經驗談」『南国紅豆』6:16-18
- 羅 麗 2005「私伙局——珠三角大衆文化的注脚」『南国紅豆』72:30-32
- 潘 邦秦 1996「“私伙局”漫評」『南国紅豆』3
- 彭 偉文 2001『広州粵曲“私伙局”研究』中山大学中文系修士論文
- 阮 桂城 2003「淺談西関文化」『嶺南文史』2:15-19
- 沈 瑞和 2002「關於“私伙局”進一步繁榮發展之我見」『南国紅豆』6:14
- 湯 垂汀 2005『城市音樂景觀』上海音樂學院出版社
- 文史組 1996「關於開僻荔湾文物文化旅遊線的建設」羅雨林（主編）『荔湾風采』広東人民出版社、p.3-9
- 周 軍 2004『歷史街区保護和復興的地理学研究——以広州西関居民民俗風情区為例』中山大学地理学系博士論文

〈英仏語〉

- Althabe, Gerard 1998
 "Ethnologie du contemporain et enquete de terrain," dans Gérard Althabe et Monique Selim, *Démarches Ethnologiques au Présent*. L'Harmattan
- Feld, Steven 1996a
 "Waterfalls of Song: An Acoustemology of Place Resounding in Bosavi, Papua New Guinea." In Steven Feld and Keith H. Basso (eds.) *Senses of Place*. Santa Fe, New Mexico: School of American Research Advanced Seminar Series
- and K. H. Basso 1996b
 "Introduction." In Steven Feld and Keith H. Basso (eds.) *Senses of Place*. Santa Fe, New Mexico: School of American Research Advanced Seminar Series
- Harvey, David 1990
The Condition of Postmodernity. [D・ハーヴェイ『ポストモダニティの条件』（吉原直樹訳）青木書店、1999年]
- Hirsh, Eric 1995
 "Landscape: Between Place and Space." Hirsh, Eric and Michael

O'Hanlon (eds.) *The Anthropology of Landscape: Perspectives on Place and Space*. Oxford: Clarendon Press, pp.1-30

Schafer, R. Murray. 1977

The Tuning of the World. New York: Alfred A. Knopf. [マリー・シェーファー『世界の調律——サウンドスケープとは何か』(鳥越けい子ほか訳) 平凡社、1986年]

Stewart, Pamela. J. and Andrew Strathern (eds.) 2003

"Introduction," In P. J. Stewart and A. Strathern (eds.) *Landscape, Memory and History*. London: Pulto Press

————— 2005

"Cosmology, Resources and Landscape: Agencies of the Dead and the Living in Duna, Papua New Guinea." *Ethnology* 44 (1): 35-47

かわい ひろなお 嘉応大学客家研究科民族学分野専任講師